

南伊豆における沿岸集落の変貌

—吉佐美地区の場合—

石井英也・齋藤功・内山幸久

Ⅰ は し が き

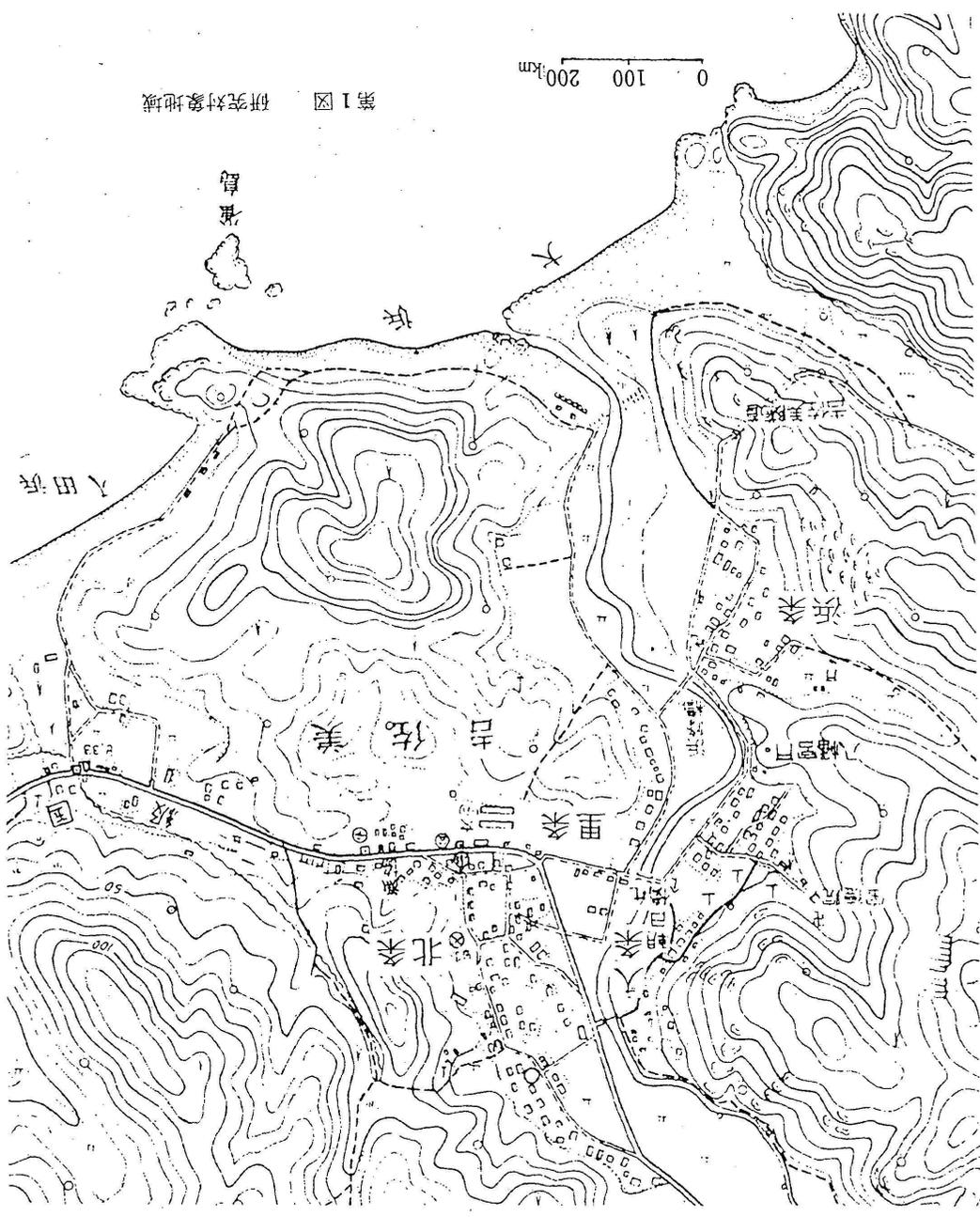
1961年の伊豆急の開通を契機とする南豆における急激な観光化と都市化の進展は、南豆の沿岸集落をあらゆる面で大きく変貌させてきた。従来の共同体的規制のなかで比較的生産性の低い方法で行なわれていた農・漁業は、生産性の向上を強く求められ、技術の改良がなされ、農漁家の専門化がなされてきた。しかし一方、都市化や観光化の進展にともなって雇用機会あるいは自営業の可能性が増大したため、就業構造は大きく変化し、農・漁業は衰退傾向にある。かくして、従来、南豆住民の生活の基盤となってきた農地・漁場の荒廃、それらの観光施設への転用といった現象が目立ってきた。

ところで、従来の南豆の沿岸集落の典型は、天草を中心とする漁業、小規模な自給農業と商品作物の栽培、製炭業などを複雑に組み合わせて生活を維持する比較的等質な農漁家によって構成されている点にあった。各部門、とりわけ現金収入源としての農業は、各時代によって異なっていたが、住民は共同体的規制のなかで、それらをうまく取り入れてきた。すなわち、彼らは、その時代の生産技術、市場の需要や他の社会環境と自然環境をうまく結合させて、1つの均衡のとれた地域生態を作りあげてきた。しかし、伊豆急開通後の観光化・都市化は、それを大きく変化させることになった。生産活動の多様化にともなって、南豆の臨海集落は、生活のリズムがそれぞれ異なる、多様な性格をもつ世帯から構成されるようになった。それゆえ、従来のように共同体的組織を維持することは困難となり、それを基盤とする地域生態は解体されつつある¹⁾。

この報告は、吉佐美を例として、かつての地域生態がいかに形成されていたか、そしてそれがいかに解体され、どのように変化しつつあるのかという実態を、その場所的環境と生産活動との関係の変化に注目することによって、分析し、記述しようとするものである。

吉佐美は、南豆の沿岸集落の中では、農業を主に、漁業を従に発達してきた集落で、白浜など漁業を中心に発達してきた諸集落とは少しく性格を異にしている²⁾。しかし、先に述べた南豆沿岸集落の変貌に関する一般性がここにおいても明瞭に認められることは無論のことである。

吉佐美は³⁾、下田市街地の南西約4kmに位置する。浜条、入条、里条、北条の4つの部落からなり(第1図)、1973年の世帯数は511、人口は1,781である。南北に流れ、大浜をへて太平洋に注ぐ大賀茂川が作る平坦地が吉佐美の中心部で、ここを東西に国道136号線が走る。太平洋岸には、大浜から北東方に入田浜、多々戸浜と砂浜海岸が続く、それらは夏には海水浴場として利用される。吉佐美の海岸は、海底の地形や潮流の関係から漁港の適地には恵まれていない。そのため、海域から生業に足る



第1図 研究对象地域

0 100 200 km

べき水揚げは獲得しえなかった。むしろ下田経済圏の一角として農産物、とくに牛乳と野菜などの生産にたずさわる近郊農村の性格を有していた⁹⁾。

1961年の伊豆急の開通以降、下田の急激な都市化にともない、そこへの通勤者が増加し、また改築

第1表 吉佐美の世帯数および人口数の推移

	世帯数	人口		
		総数	男	女
1960年	229戸	1,199人	579人	620人
1965	276	1,315	658	657
1970	382	1,578	778	800
1973	511	1,781	861	920

・新築が相つぎ、吉佐美は市田市街地の拡大の一翼をになうようになってきた。1960年まで比較的安定していた世帯数・人口数も近年著しく増加しつつある(第1表)。これは、民宿の発達をはじめとする観光化とともに、吉佐美のあらゆる側面での著しい変貌の原動力となってきた。

II 従来 の 産 業

1. 農業を中心とした吉佐美

先に述べたごとく、吉佐美は農業に主体をおく、下田の近郊農村の性格をもつ集落であった。

吉佐美では、伊豆急開通以前の1960(昭和35)年には、総世帯数のうち77.3%が農業を行なっており、そのうち専業および第1種兼業農家が74%を占めていた(第2表)。これらの値は下田全体のそれよりもはるかに大きい。農家一戸あたりの経営規模は、資料の都合上、田牛、大賀茂両地区を含めた旧朝日村の例でみると、1950年から1960年にかけて若干増加しているものの、45aほどにすぎない(第3表)。吉佐美の農家の経営規模は、1970年には旧朝日村の場合よりも若干大きいことから推定して、45aよりも大きかったことも考えられるが、いずれにせよ零細であった。

耕地面積の約50%は水田であり、ほとんどが一毛田であり、主として自給用の米を生産していた。耕地面積の約40%は畑で、残りはみかんなどの樹園地であった。畑は、各種の自給用農産物と時代によって異なる商品作物の栽培に利用されてきた。そこでは、戦前に盛んであった桑の栽培は、戦後にはほとんどみられなくなり、トマト・ナス・キャベツ・ニンジン・キュウリ・レタス・大根などの野菜類、イモ類、冬作としての麦類、さらにエンバク・青刈トウモロコシなどの乳牛用飼料作物、そして一部の畑ではストック・スナップなどの花卉類が栽培されていた。野菜類は一部を自給用とし、一部を下田市場へ出荷する重要な換金作物であった。家畜類は、乳牛・役肉用牛・馬・豚・ニワトリなど各種飼育されていた。乳牛の飼育が中心で、吉佐美は南豆における酪農の核心地であった。吉佐美では、1950(昭和25)年に83戸の農家が、1960年には全農家の約60%にあたる104戸の農家が1~2頭の乳牛飼育を行ない、牛乳を販売していた。

漁業についてみると、吉佐美では農業に主力がおかれており、専用漁家は少なかった。漁場は吉佐美の地先にかぎられ、ほとんどが2t以下の動力船あるいは無動力船を利用する沿岸漁業であった。漁業では、6月から翌年1月にかけてのイカの一本釣、春から秋にかけてタカベ刺網漁、9月から翌年4月にかけてイセエビ刺網漁、6~7月のアワビ・サザエの貝類採取、ほかに天草・ヒジキ・カジメ等の海藻類採取などが行なわれた。

第2表 下田市および吉佐美の農家数の推移

	世帯数 a	総 農 家		専 業 農 家		第1種兼業農家		第2種兼業農家		
		戸 数 b	$\frac{b}{a} \times 100$	戸 数 c	$\frac{c}{b} \times 100$	戸 数 d	$\frac{d}{b} \times 100$	戸 数 e	$\frac{e}{b} \times 100$	
1950年	A	5,792	2,563	44.2	652	25.4	1,024	40.0	887	34.6
	B	495	418	84.4	192	45.9	149	35.6	77	18.5
1960	A	6,375	2,365	37.1	394	16.7	669	28.3	1,302	55.0
	C	229	177	77.3	56	31.6	75	42.4	46	26.0
1965	A	7,347	2,234	30.4	214	9.6	745	33.3	1,275	57.1
	C	276	175	63.4	28	16.0	82	46.9	65	37.1
1968	C		173		19	11.0	87	50.3	67	38.7
1970	A	8,541	1,592	18.6	162	10.1	243	15.3	1,187	74.6
	C		158		15	9.5	40	25.3	103	65.2

Aは下田市, Bは旧朝日村, Cは吉佐美を示す。

資料: 1960, 1965, 1968年の吉佐美農家数は内藤 充卒論より, 他は農林業センサスより作成。

第3表 旧朝日村耕地面積の推移

	総 農 家 数	経営耕地 面積	1戸当たり 耕地面積	田 面 積	田 面 積 率	畑 面 積	畑 面 積 率	果樹園積 面積	果樹園積 面積率
	戸	ha	a	ha	%	ha	%	ha	%
1950年	418	172.5	41.3	94.0	54.6	63.8	37.0	9.6	5.6
1960	393	178.8	45.5	91.3	51.6	72.9	40.8	14.2	7.9
1965	389	175	45.0	90	51.4	70	40.0	13.0	7.4
1970	354	161.4	45.2	81.7	50.6	44.4	27.5	35.4	21.7
	(158)	(75.6)	(47.9)	(38.3)	(50.7)	(27.4)	(36.2)	(9.8)	(12.9)

農林業センサスより作成。

() は, 吉佐美地区を表わす。

第4表 吉佐美における農林水産業からの収益

1951年

	販売量	収 入	収入率
		千円	%
米	1,115石	6,377.8	22.2
麦	575石	2,010.8	7.0
甘 藷	87,500貫	2,957.5	10.3
牛 乳	230,120kg	6,358.2	22.1
犢	40頭	2,000.0	6.9
木 炭	10,000俵	2,100.0	7.3
海 産 物		5,000.0	17.3
蔬菜, 花卉, その他		2,000.0	6.9
合 計		28,804.3	100.0

石水照雄(1957): 南伊豆の酪農. 人文地理学談話会報, p. 29 より作成。

1951年における吉佐美の農林水産業からの収入は, 米からの収入を第1位として, 酪農, 海産物からのそれが第2位, 第3位を占めていた(第4表)。また, 甘藷および蔬菜・花卉などの畑作物の収入も海産物からのそれに匹敵する収入をあげていた。このように, 吉佐美の住民は, 農業を中心に, 山地の利用も含めて, 多様な経済活動を複雑に組み合わせて生計を維持してきた。以下この章において, 当地域の明治以後の経済活動上重要な部門であった, 養蚕業・製炭業・野菜栽培・酪農の発展過程と, それらを中心に土地利用, 季節的労働配分という制約

のなかで漁業や自給農業がいかに組み合わせられてきたのかについて検討しよう。

2. 農業の変遷

a) 養蚕の発展とその衰退

「東駿や伊豆は野生の桑が多く、とくに賀茂郡は気候温暖で養蚕に適していた」⁵⁾といわれるように、吉佐美をはじめとする南伊豆では約150年ほど前の江戸中期頃から、自給自足農業とともに、商品農業として養蚕業が行なわれてきた。明治以前に、長野や山梨の蚕種業者達が南豆に注目し、明治以降にも彼らは繭を買い入れたり、自ら当地で養蚕を行なうなどして蚕種を製造していた。その後、蚕種輸出の伸びや韮山県の奨励などにより⁶⁾、蚕種の生産量は増大したが、1873（明治6）年頃に至り、輸出の不振による価格の低下や病気の発生で蚕種生産は衰退した。しかし、座操製糸の導入により、蚕種生産は養蚕にとってかわられた。

1876（明治9）年、松崎に依田佐二平によって機械製糸工場が設立されて以来⁷⁾、南豆では松崎を中心に養蚕業が急速に発達した⁸⁾。明治中期以降には、南豆の各地に機械製糸工場が設立されていた。すなわち、1889（明治22）年に朝日村・田牛に渡辺製糸工場が設立された。さらに1892年には三浜村、1895年には南中村、南崎村、1896年には稲生沢村、岩科村に製糸工場がつくられ、吉佐美では進士製糸工場が設立された。1903年までには南豆のほぼ全域にわたり機械製糸工場が設立されていた。これらの製糸工場は、周辺の養蚕農家から繭を集荷して、操業を行っていた。しかし、吉佐美の進士製糸工場は5～6年で、田牛の渡辺製糸工場は1907年に操業停止に至るなど、工場の倒産が相ついだ。

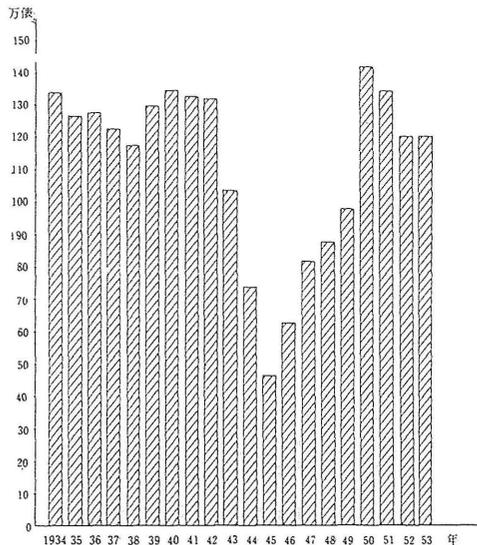
吉佐美ではほとんどの農家が春蚕を主として飼育しており、飼育場所は母屋が主体で、母屋の座敷は「おかいこさま」に占領されていたのである。蚕の飼育は立木をたて、8段に棚をつくって、その棚で飼育するインテンシブな方法であった。吉佐美で生産された繭は、進士製糸工場へ出荷されていたが、それが閉鎖された後は、南中村・一条や松崎の製糸工場⁹⁾へ出荷された。

吉佐美の1戸あたりの桑園面積は2反未満であり、それは零細で副業型の域を脱しえないものだった。その後、昭和初期の恐慌による絹の輸出不振、繭価格の下落により、吉佐美の養蚕業は不振に陥った¹⁰⁾。さらに太平洋戦争に入ると食糧増産のため、桑園の普通畑への転換が始まり、養蚕は全く不振となっていた。しかし戦後も養蚕はしばらく行なわれており、1954（昭和29）年には朝日村全体で8戸の養蚕農家が存在し、桑園も30aほど存在した。1955年頃を境として養蚕は全く行なわれなくなった。

b) 山地利用の変遷

吉佐美地区の1戸あたり山林所有は、平均1～2ha、最高でも10haほどで、南伊豆地域のなかでも狭小である。そのうえ山肌が悪く、杉・檜などの植林はほとんどなされておらず、山地の大半は雑木林である。山地の保有者はほとんど戦前からの農家で、戦後に入村した農家、あるいは戦後に分家した農家の大部分は山林を保有していない。また吉佐美の共有地としては、約30haの「郷山」¹¹⁾と呼ばれる林地と約10haの「野ソウ」と呼ばれる草地があった。170戸の農家がこれら共有地の株を所有し、株の所有者数は一定に保たれてきた。

吉佐美においても共有地を含めた山林は、古くから木炭生産に利用されてきた。炭焼きは農作業の比較的ひまな冬季を中心に行なわれ、冬季の現金収入源として、山域の重要な利用法であった。焼か



資料：新南豆風土誌p.326より

第2図 賀茂郡における木炭生産量の推移

れた炭は伊豆炭として京浜市場へ出荷された。ことに「アカ」と呼ばれる椎、ナラ、桜を原料とする上質の白炭は京浜市場において好評をかくしていた。吉佐美での炭焼きは1935年頃に最盛期を迎えたが、その後、戦時中から戦後にかけて、炭焼き職人が不足したこともあって、それは衰退した。また当時、燃料の不足から木炭生産は質より量が問題とされ、炭の種類は比較的簡単に大量生産できる黒炭が多くなった。戦後一時、生産量の増加につれて、市場で品質の良い木炭が歓迎されるようになるとともに、生産技術の向上がはかられ、戦前の品質に劣らない優良炭が再び生産されるようになった。1953年には、吉佐美、田牛、それに大賀茂を含めた朝日村では15kg入りの俵で33,316俵が生産されていた(第2図)¹²⁾。これは賀茂郡全体の2.7%を占

めていた。しかしその後、木炭製造は、石油・ガス類などの燃料革命の進展にともない、需要が減少し、吉佐美では1955年頃を境として木炭製造はほとんど行なわれなくなった。

一方、共有地のうち、「野ソウ」と呼ばれる草地の大半は各戸に貸しつけられ、個々に管理・運営された。ただし、4月初旬には苗代草の「口あけ」と称して、1日だけ各戸から1人ずつ出て草刈りにでるのが恒例の行事として行なわれていた¹³⁾。野ソウは、酪農が行なわれていたため牧草地として利用された。

その他の山地の利用法としては、山地の斜面にしばしばみられる孟宗竹が東京方面へ出荷されており、また雑木が薪として利用されていた。しかし、薪も木炭と同様に戦後の燃料革命が進行するのにもない、利用価値を失なっていた。

c) 野菜栽培の変遷

吉佐美の耕地分布をみると、大賀茂川をはさんで川下に畑地が、川上に水田地がひろがっており、尾根上の平坦地や海岸段丘上は畑地となっている。大賀茂川を中心としたいわゆる「下畑上田」¹⁴⁾の変則的な地目形成は、中央部を流れる大賀茂川が川底の浅さから川下においてよく氾濫すること、またそれは小河川で¹⁵⁾、水量に恵まれず、上流部に分布する水田を灌漑するのが限度であること、および河口附近の海岸に砂丘が形成されつつあることなどの理由による。このような事情から下流には畑地が多く分布するようになった。それゆえ、河口の大浜から上流へ1kmほどの北条あたりまで水田はほとんどみられない。

第5表 主要野菜栽培一覧

昭和30年代

作物名	品 種 名	種植期	定植期	畦 幅	株 幅	収穫期	反 収
ト マ ト	福世 界 寿一屋	1月中	4月上中	25~30	12~15	5月下	600宛
		2月上				7月	1,000
抑 制 ト マ ト	福 寿 2 号 栗 原	6月下	8月中	27	17	9月下	400
		7月中				12月上	600
ス イ カ	新 大 和	3月下	—	60	40	7月下	600
		4月上				8月	1,000
キ ュ ウ リ	相 横 半 白 落 合	2月上	4月上中	30	12~15	5月下	300
		3月中				7月	600
甘 蒨	ニユーオレゴン ダニッシュ 初富 士 早 桜 生	8月下	9月上	25	12~15	2月下	600
		9月中	11月			5月	1,000
レ タ ス	グレートレーク	8月下	10月上	10	6~7	12月	200
		9月中	11月			4月	300
大 根	美 濃 早 生 練 理 馬 想	7月下	—	25~30	6~10	9月	700
		9月上				12月	1,000
サヤエンドウ	伊 豆 赤 花	8月上	—	25~30	条 播	9月	80
		9月上				4月	150

資料：東賀地区農業改良普及所（1957）：農業改良計画，p.34より作成。

このような条件のもとで、水田では稲作と、裏作として一部の水田で麦類の生産が行なわれてきた。吉佐美を含む朝日村の水田面積は、農業センサスによると1950年に94ha、1960年に91.3ha、1965年には90haとほとんど変化していないが、農家1戸あたりの面積は非常に零細で、大部分の米は自給用として消費され、出荷販売されているのは少なかった。

一方、畑地のうち桑園は、養蚕の衰退と相まって、昭和初期から次第に普通畑へと転換されてきた。戦中・戦後の米麦を主体とした食料増産期をへて、残存していた桑園も僅かになった。普通畑では出荷用のイモ、野菜の栽培が盛んに行なわれた。朝日村の普通畑面積は、1950年に68.3ha、1960年に72.9ha、1965年には70haでほとんど変化していない。しかし、イモ類、野菜類の収穫面積は、1950年に60.8ha、1960年に68.5haであったのが、1965年には56haでやや減少を示している。このような傾向は、吉佐美でも同様である。第5表に、昭和30年代に栽培されていた主要野菜の一覧を示したが、吉佐美ではほかに、夏作のトマト、キュウリ、ナス、サトイモ、サツマイモ、冬作としてホーレン草、大根、カブ、白菜、ネギなどの多種類の野菜が生産されていた。生産された野菜は、一部が自給用として消費され、多くは下田へ出荷・販売された。

吉佐美では、また収益を高めるために、ストック、ジュベローズ、スナップなどの花卉栽培も行なわれた。朝日村への花卉導入は1933（昭和8）年に房州出身の黒川寅松らが花卉栽培の適地を求めて移住してきたのに始まる¹⁶⁾。その後、上記の花弁類を中心に、花卉温室園芸がなされるようになっ

たが、南伊豆町・大瀬や下田市・白浜のように、花卉栽培専門の農家は出現することなく、一部の農家で農業経営の一環として行なわれたにすぎない。花卉類の収穫面積は、1960年の農業センサスによると70 a 存在したことが記録されているが¹⁷⁾、1965年にはすでに、それは僅かに残っているだけで、販売戸数は9戸にすぎなくなった。

d) 酪農の変遷

南伊豆では1869（明治2）年に岩科牧場が開かれたり、明治末までには下田や松崎に搾乳業者が出現し、酪農業発展の基盤が醸成されてきたが¹⁸⁾、吉佐美での酪農は、1917（大正6）年頃に、下田で肉屋をしていた酒井某の販売用牛乳の不足を補うべく、佐藤某により始められた¹⁹⁾。吉佐美での酪農の導入は、従来の自給的農業および養蚕業、さらに山地での製炭業にたずさわってきた吉佐美の農民にとって画期的なことであり、以後それは急速に発展した。当初には、伊豆大島の搾乳夫が乳牛の管理に雇用され、吉佐美酪農の発展に寄与した²⁰⁾

生産された牛乳は、1919（大正8）年に稲生沢村・中に設立された東洋煉乳株式会社を持ち込まれ、処理された。東洋煉乳株式会社は、吉佐美をはじめとする南伊豆での牛乳を処理するために、資本金15万円で、南伊豆各地の乳牛生産に関する地域的リーダーによって設立された。また、このほかにも南伊豆各地でバター製造所が設立され、それらは1927（昭和2）年には、吉佐美など11ヶ所に存在した。東洋煉乳株式会社は資本金不足から1927年に閉鎖されたが、1932年に千葉県安房郡の石井米蔵²¹⁾がこれを買収し、明治乳製品株式会社を設立した。この間、牛乳は三島の昭和煉乳に販売されていた。明治乳製品株式会社は、1937年に森永下田煉乳株式会社となり、今日の森永乳業下田事業所にひきつがれた。

東洋煉乳株式会社の設立が刺激となって、その後南伊豆では酪農家が急増したが、吉佐美は昭和初期には酪農の最も盛んな地域となった²²⁾。牛乳の生産量は、1943（昭和18）年には、西海岸7ヶ村

で1,388.8kg、東海岸13ヶ町村で6,213.2kgであったが、吉佐美のそれは1,725.0kgで、稲梓とともに酪農の核心地域を形成するに至った。生産された牛乳は、ほとんど森永乳業下田工場で

第6表 旧朝日村および吉佐美の乳牛飼育戸数および乳牛頭数の推移

	旧朝日村		うち吉佐美	
	戸数	頭数	戸数	頭数
1950年	128	156	83	109
1951	131	154	84	115
1952	136	162	84	120
1953	143	176	87	131
1954	150	203	93	160
1960	171	210	104	180
1965	133	144	79	148
1968	87	96	53	67
1970	56	84	36	52

1950～'68年の旧朝日村、吉佐美の乳牛飼育戸数および吉佐美の乳牛頭数は内藤 充卒論より、1950～'54年、1968の旧朝日村乳牛頭数は静岡県賀茂支庁畜産課資料より、その他は農業センサスより作成。

第7表 旧朝日村乳牛飼育頭数別農家数

	1960年	1965年	1970年	
飼育農家数	171戸	133戸	56戸	
2歳未満農家数	53	52	26	
2歳以上農家数	1頭	102	70	26
	2	14	11	
	3	2	0	3
	4	0	0	
	5	0	0	1
	6	0	0	

農林業センサスにより作成。

処理された。戦後も、吉佐美では盛んに酪農が行なわれた。ここで乳牛頭数の推移をみると（第6表）、吉佐美を中心とする旧朝日村では、それは1948（昭和23）年に121頭であったが、1954年には200頭をこえ、1958年には231頭とピークを示すに至った。1960年農林業センサスによると（第7表）、旧朝日村では総農家393戸中171戸が乳牛飼育を行っており、そのうち104戸が吉佐美に集中していた。旧朝日村における酪農家の大部分は耕地面積1ha未満の小農で、飼育頭数はせいぜい3頭であり、2才以上の乳牛飼育を行なう農家のうち90%は飼育頭数が1頭であり、酪農専業農家は存在しなかった。この頃の乳牛の品種のほとんどはホルスタイン種であった。

各酪農家は、母屋のほかに畜舎を有していた。畜舎は一般に、通風、採光が悪い不備なもので、また放牧地もせまく、家の庭を兼ねたものが多かった。購入飼料は、混合飼料が用いられ、自給飼料としては、春から秋にかけては野草が利用され、また飼料作物としては4～6月にエン麦、6～9月に青刈りトウモロコシ、10～12月に芋の葉および茎、さらに冬季飼料として大根・カブなどが用いられた。牧草としては、オーチャードグラスが僅かに栽培されているにすぎなかった²³⁾。当時、乳牛1頭につき15～20aの飼料畑を必要としたが、各酪農家では所有耕地面積がせまく、野菜畑との競合もあり、飼料作物を十分栽培することができなかった。そのため青刈り飼料の不足分を近くの山林、共有地、さらには遠く妻良、子浦あるいは天城にまでも求めに行き、この作業が労働力配分上大きなウェイトを占めていた²⁴⁾。

酪農で生計をたてるためには少なくとも3～4頭の乳牛を飼育することが必要であったが、零細な耕地面積ではそれも不可能であり、酪農家の多くは水稲作のほかに、野菜・花卉類の栽培、出荷を行っていた。また、吉佐美の酪農家は、子牛を生ませて、それを東京近郊などの農家へ販売し、現金収入を得ていた。この子牛の販売は、優良牛を飼育する酪農先進地域の一大特色である。しかし、1958（昭和23）年頃から、乳牛頭数は減少し、南伊豆全体的にみれば、酪農の核心地域は吉佐美などの海岸部から内陸へと移動していった²⁵⁾。

3. 土地利用の変遷

伊豆急開通以前の吉佐美における産業の変遷についてみたが、ここで土地利用を中心にそれについてまとめてみよう。

吉佐美では、明治から大正にかけて、集落周辺の耕地では自給用としての米作および麦類と野菜類が栽培され、これらの一部は下田へ出荷されていた。また換金農業として養蚕が盛んに行なわれ、桑園が多かった。山地では薪炭生産が行なわれ、自生の竹とともに京浜市場へ出荷されていた。山地の共有地は、屋根ふき用のかやの採取地として利用されていた。しかし大正中期の酪農の導入とともに、農業経営の比重は養蚕から酪農へと移りかわった。昭和恐慌は、養蚕業をさらに衰退させた。

昭和初期から戦争前頃の吉佐美での土地利用をみると、集落内部では、養蚕を行なう母屋と、牛を飼育し、農具を保管する納屋が一般的農家構成となっていた。農家の庭、あるいはその周辺の耕地の一部は放牧地として利用された。集落周辺の耕地をみると、水田では米作が続けられる一方、畑地では桑園が普通畑へと転換され始めた。しかし、養蚕は完全に行なわれなくなったわけではなく、その消滅は戦後をまたなければならぬ。普通畑では、麦類・野菜の栽培のほか、酪農が盛んになるにつ

れて、一部で飼料用作物が栽培され始めた。また、昭和初期には花卉類も導入され、農業経営の一環として温室での花卉栽培が始められた。一方、山地は、以前からひき続いて薪炭の生産に利用されていた。とくに木炭生産は、1935（昭和10）年頃に最盛期を迎えた。山地の共有地は、かやの採取地としてだけでなく、酪農の発達とともに飼料採取地としての性格をもつに至った。そして海域では、従来にひき続いて、タカベ・イカ・イセエビなどの漁や貝類・天草の採取が続けられた。その後、戦争が激しくなるにつれて、耕地は米麦主体の土地利用へと変化してきた。

戦中・戦後の食料増産期から伊豆急開通に至る時期には、吉佐美では農家の母屋で行なわれていた養蚕が全く行なわれなくなった。酪農は盛んになったが、しかし納屋を利用した畜舎内の牛の頭数はせいぜい3頭で、規模は零細であった。畑では桑園が姿を消し、普通畑がふえ、そこではトマト・ナスをはじめとする多種類の野菜が生産され、下田へ出荷されるようになった。また、酪農用飼料作物の栽培も行なわれ、山地の共有地も飼料採草地として利用が進んだ。山地は薪炭生産地として利用されたが、その後、1953（昭和28）年頃から石炭・石油の利用が進むにつれ、薪炭生産は衰退していった。昭和初期に導入された花卉は、戦後にも一部の農家で農業経営の一環として栽培されたが、酪農や野菜生産のように吉佐美地区へ十分普及するには至らなかった。

このように、吉佐美が下田市場への野菜・牛乳供給地として近郊農村的性格を有していたことは、戦後一時期まで次のような労働慣行があった²⁶⁾ことからもうかがい知ることができる。すなわち、男性は自ら大八車をひきいて、あるいは役牛で、あるいは海路、下田一大浜一入田間を無動力船を使って下田の民家や旅館に行き、4束ソダと人糞肥料を交換してくるのが1つの仕事であった²⁷⁾。このような肥料としての人糞との交換はやがて金肥の普及によってみられなくなっていくわけであるが、吉佐美では野菜栽培と結びついた労働慣行が存在していた。

以上のように、明治から大正、昭和初期をへて、戦後の伊豆急開通以前まで、吉佐美では、社会的・経済的条件の変化にともなって、作物の導入・衰退、あるいは乳牛の導入などの農業経営の変化がみられた。吉佐美は、野菜生産あるいは酪農の導入により、下田の近郊農村としての性格を強めたものの、従来の農村の域はでなかったのである。しかし、伊豆急開通以後、下田を中心とする観光化と都市化の進展によって、吉佐美は大きく変貌してきた。

Ⅲ 最近の産業の変化

1. 農業経営の変化

1961（昭和36）年の伊豆急の開通を契機とする吉佐美の変貌のうち、まず農業の変化をみてみよう。

吉佐美の農家数は、1960年以来ほとんど変化しなかったが、1968～70年の間には15戸が脱農するに至った（第2表参照）。専業農家、第1種兼業農家の減少も著しく、1968年には両者合わせて全農家の61.3%（106戸）を占めていたのに対し、1970年には34.8%（55戸）となり、一方、第2種兼業農家が67戸から103戸へと著しく増加した。とくに伊豆急開通前の1960年には専業農家が56戸（31.6%）であったのに対し、1970年のそれは僅か15戸（9.5%）にすぎない。40～70 aの耕地所有農家の兼業

化が著しい²⁸⁾。1960年には30～40 a層でも専業農家としてますます自立可能であったが、1969年頃には70～80 a以上の耕地を所有する農家でなくては農業のみで生計をたてていくことは極めて困難であるといわれるようになった²⁹⁾。

1960年頃の酪農最盛期には経営耕地の大小にかかわらず、全階層で乳牛を飼育していたが、1970年には飼育頭数および乳牛頭数ともに最盛期の3分の1にまで減少した（第6表参照）。自立経営農家として規模拡大を目ざしている農家は、1 ha以上の耕地をもつ最上層の農家数戸にすぎず、これらの農家は乳牛飼育をしているが、最近では搾乳用というよりも、高等登録を受けた乳牛の育成に重点をおきつつある。

農家数の減少は、耕地面積の減少、荒地化となってあらわれている。吉佐美を含む朝日村では1565年から1970年にかけて、耕作面積が約14ha減少した（第3表参照）。その内訳をみると、畑、水田の減少が著しい。吉佐美での畑の放棄地は大賀茂川下流の冠潮冠水を受けやすいところや、山地の尾根に多く、水田の放棄地は集落から比較的にはなれた小河川の谷底地域に多くみられる。さらに、1970年の農業センサスのなかで耕地として登録されている田総面積3,831 aのうち85 aが、畑総面積2,116 aのうち624 aが過去1年間全く作付されておらず、荒地化したり、一部は夏季おしよせるマイカー海水浴客の駐車場となったりしている。このようななかで、旧朝日村では、果樹園が1965年の13.0haから1970年には35.4haと約3倍に増加したことは注目される。果樹園のほとんどはみかん園である。

このような農業衰退傾向のなかで、吉佐美で農業専業を目指す農家は、自給用としての米作のほかに、前述の酪農経営、および従来からのトマト・ナス・ウリ・カンラン・レタスなどの出荷用野菜栽培を強化する一方、みかん栽培の拡大にのり出している。

吉佐美では従来から僅かながらみかん栽培がなされていた。みかん園は山地の東斜面や南斜面に多くみられ、一部はかつて水田や畑であったところへも進出してきている。みかん園は、冬季の強い西風をさけるため、そのほとんどがマキなどの防風林に囲まれている。大賀茂川西方、山の尾根から東斜面には、とくに大規模なみかん園団地が広がっている。これは、1966年から賀茂郡農業構造改善事業の一環として造成されたものである³⁰⁾。造成みかん園の面積は約8.97haで、その大部分はかつての共有林を開墾したものである。樹園地は階段状に造成され、その周囲には排水路と防風林あるいは防風垣が設けられている。さらに、みかん園には貯水槽や防除器具などが設置され、共同防除が実施されている。ここでは1967年から甘夏みかんの栽培が行なわれている。この事業への参加農家は23戸で、浜条、中ノ尾、山光神の農家である。それらは比較的若い農業従事者によるものが多く、農業に積極的な意欲をもつ農家でもある。各農家のここでの所有みかん園は、80 a以上が1戸、50～80 aが6戸で、残りは50 a以下である。生産されたみかんは、他地区のみかんとともに、1969年に下田農協・南伊豆農協・西伊豆農協の共同の農業構造改善事業として下田市に建設された共選所へ運ばれ、関東・東北市場へ出荷されている。

このように、吉佐美では全体として農業が衰退してゆくなかで、最上層に属する一部の農家は積極的に農業にとり組んでいる。

2. 他産業への就業

伊豆急開通以後、農業衰退の傾向がみられたが、これは、南伊豆の観光産業の発達、下田の都市化の進展により、農業以外の第二次、第三次産業への雇用が増大したことによると考えられる。吉佐美では、とくに所有耕地40~70 aの中層農家や、所有耕地40 a未満の下層農は、民宿経営を開始したり、また下田で恒常的勤務につくなどして、兼業化・脱農化してきた。つまり吉佐美は、南伊豆最大の中心地機能をもつ下田までバスで20分以内の距離にあるため、ここでは農家労働力の賃労働化が進んできた。ここでは、まず民宿経営以外の農家の兼業をみてみよう。

吉佐美における農家・男子の農外への恒常的就労者は、建設・製造の第二次産業やサービス業を主

第8表 農家男子の農外就労形態 1968年

恒常的 賃労働勤務	14	建設会社員	3
		製造業従業員	4
		サービス業従事者	7
恒常的 職員労働勤務	6	教員	2
		市職員	1
		その他職員	3
人夫・日雇い	6	土工	4
		農業手伝い	1
		木挽	1

内藤 充 (1969): 前掲 2) の調査結果より作成。なおこの調査の対象農家は50戸。

とする第三次産業に多い(第8表)。その就業地は、ほとんど下田である。そして他産業への就労は、年齢はともかく、世帯主よりも後継者に多い。また、非恒常的勤務をみると、土工・建設業・農業手伝いが多く、就業先は吉佐美などの近隣地である。これは、中・高年の世帯主層が人夫・日雇いとして、冬季と農閑期に賃労働を行なうためであり、農業後継者の恒常的勤務が、高校を終えた青壮年期に他産業に就業するのと対称的である。これらのことは、地域中心都市・観光都市として発展している下田とその付近の地域の状況を反映しているとみることができよう。吉佐美では、従来から、農業を行なうために2・3男に相続させたり、分家させたりすることはなかった。従って、2・3男のほとんどは、学校卒業後、静岡・沼津・東京方面で就職するのが一般で、たとえその地に留まっても、第二次、第三次産業に就労する。

農家の婦女子の就労形態をみると³¹⁾、主人の就労形態にかかわらず、農業に従事しているのが普通である。また、民宿経営を行なっている農家では、婦女子はそれに従事するが、民宿を経営していない農家では、婦女子が季節的に近くの民宿の手伝いをしたり、下田の旅館で就業する例も多い。未婚女子の場合には、農業に関係することはまれで、下田市内をはじめとする各地で賃労働に従事する。

兼業としての漁業は、他の南伊豆の臨海漁村と違って、吉佐美では盛んでない。1968年には、漁船隻数37、トン数にして39 tあまりにすぎず、うち動力船は僅か2隻にすぎなかった。その後、動力船が増えたが、吉佐美は漁港設備をもたず、この漁業はますますその意味をなくしてきた。漁協組合員は200人あまり存在するが、彼らの多くは、ノリ・ヒジキ・天草などの海藻類の採取権を得るため、および組合維持をはかるために組合員であるのであり、正組合員は50戸ほどにすぎない。定期的に漁業に従事して何らかの水産物を販売し、収益を上げているのは組合員の1割にも満たない。このように、吉佐美での兼業としての漁業はみるべきものがない。

3. 民宿の成立

吉佐美における農家のもう1つの大きな兼業機会は、観光客の増加によってもたらされた。南伊豆

第9表 民宿経営世帯の実態

1968年

民宿番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
経営耕地面積(a)	50	50	60	60	35	—	63	23	なし	30	—	—	—	40	30	—
山林面積(a)	500	20	若干	—	若干	—	600	—	なし	若干	若干	—	—	—	—	—
世帯員(人)	5	7	6	6	4	7	7	6	5	8	3	5	6	6	8	8
世帯上の職業	農業	農業	農業	農業	会社員	大工	教員	農業	商店員	農業	農業	農業	農業	農業	農漁業	農業
民宿開始年	1968	1967	1967	1965	1967	1961	1967	1967	1967	1967	1967	1967	1967	1967	1967	1968
立地の特色(m)	海に300	300	300	約1,400	約1,500	1,500	1,300	100	30	100	—	—	—	—	—	—
収容力(人)	22	17	13	13	—	—	15	—	14	15	—	14	16	16	15	16
資金の調達元	ほぼ自費	自費農協	農協6割	—	—	アパート転用	山林売却	農協	農協8割	山林売却	—	—	—	—	—	—
利用客状況(人)	900	900	800	600	400	650	600	1,000	1,000	600	1,000	—	—	—	—	—
所得中の民宿収入の割合	若干	6~7割	2~3割	1割	2割	若干	2割	5割	3~4割	—	民>農	農>民	5割	民>農	—	若干
今後の民宿に対する希望	農業と民宿をの両立を主	—	—	民宿を勧めを主	民宿を止	農業と農協の両立	農業と農協の両立	—	—	民宿を主	—	—	—	—	—	—
備考	—	—	海の家所有	牛舎改築して以前民宿開始	—	—	喫茶店経営	—	—	—	以前寮経営	—	—	—	—	—

では、1961年以降、伊豆急や東海自動車K・K.の働きかけを契機として、須崎・白浜・雲見などで民宿が成立してきた³²⁾。吉佐美でも、夏の海水浴客の増加により、1962年に大浜にキャンプ場が設置された。このキャンプ場に吉佐美区の依頼を受けて売店を出していた農家が、海水浴客の要請もあって、1965年に民宿を開業した³³⁾、その後、民宿が増加し、1968年には吉佐美民宿協会が設立されるに至った。

吉佐美では1971年までに民宿数は22戸に増え、ほかに民宿予備軍ともいうべき新築家屋が多数存在するようになった。吉佐美には、多々戸・入田浜・大浜という砂浜が存在し、訪れる観光客のほとんどは夏季の海水浴客である。1969年には、吉佐美・田牛を含めて、海水浴客25万人、キャンパー5万人、民宿客20,970人であった。吉佐美の海水浴客数は、南伊豆では弓ヶ浜(41万人)、白浜(39.5万人)、今井浜(25万人)につぐ。しかし、宿泊客数は白浜のおおよそ1/4で、そのシュアーは相対的に小さい。吉佐美は、もともと漁業よりも農業に主体をおく集落であった。そのため、白浜などと異なり、地区内に海浜があるとはいえ、集落は海浜から300~1,500mほど離れている。これは、民宿の立地に不利であった。

吉佐美での民宿は、所有耕地70a未満の中・下層農家の副業として始められた。これは、伊豆急開通以後、兼業化した層と一致する。民宿開始のための資金は、農協からの借り入れ、あるいは土地の売却によるものが大部分を占める。一般に、民宿経営には4人ほどの労働力を必要とする。多くの民宿は家族労働力で営業を行なっているが、家族労働力で足りない時には近隣の婦女子を雇う。この場合、恒常的雇用はほとんどなく、繁忙期にのみ臨時雇いをするのが普通である。

ここで吉佐美において民宿を開始した農家の例をみよう(第9表参照)³⁴⁾。民宿番号4番は、世帯主とその妻、世帯主の母、長男(会社員)、長女(高校生)、次女(小学生)の6人家族で、1965年に

民宿を開始しており、吉佐美における民宿の草分け的存在である。民宿の位置は大賀茂川右岸にあり、海より1,400mほど離れている。海辺に、海の家（飲食店と4間の休憩室）をもっている。民宿には母屋が利用されている。民宿経営は家族労働力を主体に行なわれるが、7月下旬から8月中旬の繁忙期には2人が臨時に雇われる。この家は、所有耕地60aほどで、吉佐美では中層農家に属する。この家は、1947年から1965年まで乳牛3頭を飼育していたが、1959、'60年に相次いで父、母を失ない、労働力不足もあって酪農を廃止した。両親の死後、1960年に畑13aを売却し、その資金を海の家へ投資した。そして、小規模ながら野菜栽培を行ない、下田市場へ出荷し、さらに妻は下田のホテルで年30日位夜間勤務をして家計の補助をするという生活が続いた。1965年に至って民宿を開業した。現在、農業も続けているが、民宿からの収入のウェイトの方が高い。

民宿番号14番は、6人家族で、耕地面積は40aである。世帯主とその父は、戦前より製炭・野菜栽培および酪農を続けてきた。しかし木炭生産が不振になってからは、冬季に20~40日程土工として現金収入を得てきた。妻とその母は、戦前より今日に至るまで下田で野菜の行商を行なっている。主な野菜は、トマト・ナス・ウリ・大根・レタスであり、青果市場への出荷は少ない。乳牛は、ホルスタイン種1頭が飼育されている。民宿は1967年から始められた。母屋が改造され、3部屋がそれに供せられている。民宿経営は、吉佐美の他のほとんどの民宿と同様、夏季のみ忙しいが、家族労働力でまかなわれており、雇用労働力はない。現在、この家では民宿の収入の割合が高い。今後も、民宿経営を続ける一方、農業も米・野菜の生産を行なってゆく予定とのことである。

4. 景観の変化

a) 共同体的社会の崩壊と景観の変化

南伊豆の臨海漁村は、海域利用の活動を中心として、長い間共同体的性格を強くもってきた。すなわち、各農漁家は、複雑な労働暦をもつ産業の組み合わせによって生計を維持してきたが、あくまで共同体的規制の枠のなかで、同一の生活リズムをもっていた³⁵⁾。このことは、海域の利用が少なかった吉佐美でも同様で、共同漁場の利用をはじめ、他に多くの村仕事があった。主なものは、村道の道普請、共有地である郷山の植林および下刈り、大賀茂川の川ばらえ、オオセギ（年1回、田植前に水田に水を引く作業）、シダイケ（防風林に対する作業）、防潮堤造り、浜掃除、神田の共同作業などであった³⁶⁾。村仕事には必ず参加することが義務づけられていたが、病気など止むをえず出られない場合には、全組頭の協議のもとに免除されることになっていた。しかし、これは家の恥とされていたため、通勤者は職場を休んだり、また近所衆（什長単位³⁷⁾）に頼み代理人を出すようにしていた。

その後、通勤労働者が増加するにつれて代理人の確保さえ困難になった。それゆえ、村仕事に出ない家は、「出不足」として規定額を区に納入するようになり、村仕事の実施が次第に困難になってきた。道普請、防潮堤補修工事などの作業は、区が業者に依頼して行なうようになった。

また吉佐美には、約30aの「郷山」と約10aの「野ソウ」と呼ばれる共有地が存在した。しかし、郷山は一方では、製炭業の不振により利用価値を失ったこともあって、ここでの植林・下刈り等の村仕事も行なわれなくなってきた。採草地、カヤ場の役割をした野ソウも、酪農の衰退と、農家の屋根がかやぶきからトタンあるいは瓦ぶきになるにつれ、その存在理由を失ってきた。このような状況か



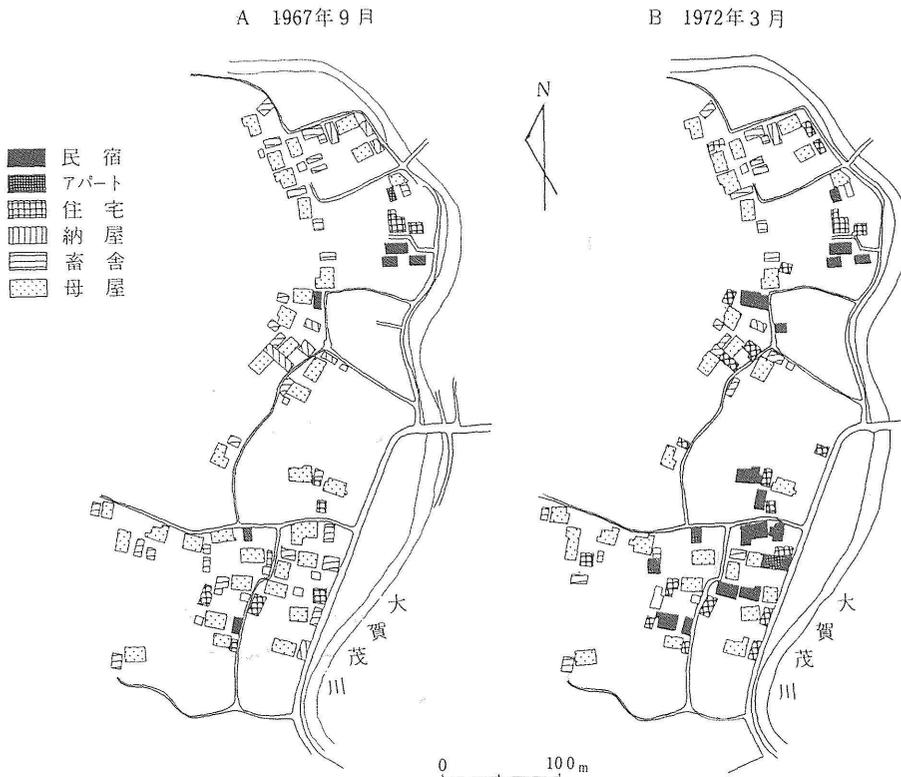
第3図 下田市吉佐美地区土地利用図

ら、共有地の吉佐美区民への貸与が進行し、さらには区民への払い下げ、または「よそ者」への売却へと進んでいった。共有地は1960年以降、希望する農家へ、坪あたり90~400円という安値で払い下げられた。払い下げられた共有地は、農業構造改善事業によるみかん園にされたり、シイタケ栽培、杉あるいは檜の植林など、農家によって様々に利用されてきた。このように、従来からの共有地景観は一変しつつある。

b) 集落景観と土地利用の変化

ここでは、集落景観と土地利用の変化をみてみよう。集落景観を大きくかえたものとしてまず民宿の発達が挙げられる。吉佐美の民宿は、1965年に始まり、1971年に22戸に増えたことは前述したが、その後1974年には40戸を越えた（第3図）。伊豆の農漁家は従来より小規模で、民宿の開設には改造を必須とする。そのため伊豆には小旅館型民宿が多い³⁸⁾。

1967、'72年の入条部落を例にとって、このことをみてみよう（第4図）。1967年には各農家の構成は、母屋十畜舎あるいは納屋が一般的であった。当時すでに乳牛飼養農家は7戸にすぎなかったが、かつての酪農の興隆を反映してまだ多くの畜舎が残存していた。しかし、1972年になると、乳牛飼養農家は僅かに1戸になった。このようななかで、畜舎あるいは納屋の数が著しく減少してきた。



第4図 吉佐美入条部落の集落景観

それらは改築されたり、建直しされて、住宅や民宿用の部屋に変えられた様相が明確にみとれる。民宿は1967年の3戸から1972年には6戸に増えたにすぎないが、これらの新・改築は民宿予備軍と考えられる。事実、7月20日頃から8月10日頃までの海水浴のピーク時には、ほとんどの農家が観光客を泊めるといわれ、それにはこれらの新・改築された部屋が利用される。

また、この新・改築された家屋は、下田近郊という地の利をいかし、アパート経営や貸家としても利用されてきた(第4図)。アパート経営は、1967年の2戸から1974年には6戸に増えている。その後、1974年には民宿が9戸に増加し、従来の畑地に宿泊施設を増築したり、下田に通勤するサラリーマンの住宅がつくられるようになってきた。とくに後者は、当然のことながら入条部落の中心部より、むしろ吉佐美の旧集落の外縁部、とくに国道136号線沿いや山麗線沿いに多い。

このような民宿化、都市化のなかで、農業はほとんどその価値を失い、作付放棄地が実によく増えてきた(第3図)。水田は、大賀茂川の上流部に現在もみられるが、山地から流れ出している小河川周辺の比較的條件の悪いところでは荒地となっているところが多い。畑地も、トマト・ナス・レタス・ゴボウ・ネギ・大根など自給用野菜の栽培に利用されている一方、段丘上や尾根では荒地が目立つ。ただ吉佐美の西方では、かつての山林共有地で、みかん園が多くつくられている。第3図から読み

ることはできないが、海のみえる眺めのよいところでは会社の寮や研修所が建設されていたり、海水浴場付近の畑や浜が駐車場に利用されている例も多い。

かつて農業と結びつけて利用されてきた山地の利用も著しく変化しつつある。外来の不動産会社に買収された山地が多く、その一部はすでに別荘地として開発されている。とくに国道136号線北側の南豆不動産K.K.による別荘地は大規模なもので、その面積は20万m²にも及ぶ。そして赤、青などの原色の屋根をもち、山地斜面上に鉄骨で支えられた別荘が木々の間から垣間見え、山地景観を一変させている。

このように、農・漁業の衰退と、逆に通勤者・民宿の増加、それらにともなう共同体的社会の崩壊などが密接に結びついて、吉佐美の景観はあらゆる面で大きく変化してきた。

Ⅳ おわりに

吉佐美は、農業活動を主に発達してきた集落で、沿岸漁業の盛んな南豆の沿岸集落のなかでは少しく性格を異にしている。明治から大正、昭和初期をへて1961年の伊豆急開通頃までに、ここでは養蚕と自給的色彩の強い農業との組み合わせから次第に酪農や野菜栽培への転換がはかられ、吉佐美は下田の近郊農村としての性格を強めてきた。しかし、我々が既に明らかにしたように、山地・耕地・海域での様々な経済活動を複雑に組み合わせて生活を維持する比較的等質な農漁家からなるという南豆沿岸集落のかつての基本的特徴からみると³⁹⁾、吉佐美も例外ではなかった。ここでは、山地での薪炭製造・採草、水田での米作、畑地での雑穀・自給野菜と各時代によって異なる現金収入源としての養蚕・酪農・野菜・花卉栽培、それに小規模な沿岸漁業などの経済活動が、強い共同体的規制のなかで組み合わされてきた。

その後、1961年の伊豆急の開通にともなう南豆の急激な観光化のなかで、吉佐美も急速にその地域生態を変化させてきた。地域形成の新しい担い手ともいえる外来資本をふくむ観光産業の発達のおかげで、地元民の所得を向上させようとする意欲を農業や漁業で満足させることが難しくなり、生活の仕方の変革がなされねばならなくなってきた。吉佐美では、他の南豆の沿岸集落と比して民宿の発達は遅かったが、下田の発展にともなって、恒常的なものであれ、非恒常的なものであれ、通勤者が急速に増加した。そのため、かつての村の共同体的社会の維持が困難となり、共有地の放棄・売却が進み、それが外来資本の一層の進出に拍車をかけることとなった。現在では、民宿も増え、民宿あるいはアパート経営のための新・改築が活発になされている。そのため、農地の耕作放棄、漁場の荒廃などばかりでなく、民宿への過剰な設備投資のための耕地の売却による経済的不安定性など多くの問題が生じてきた。いずれにせよ吉佐美は観光化と下田の郊外化という二面性を持ちながら、新しい地域生態を模索しつつ、急速に変貌しつつある。

註・参考文献

- 1) 尾留川正平・山本正三他(1974)：他南伊豆における沿岸集落の変貌。地学雑誌，第83巻，第4号，1～27。
- 2) 内藤 充(1969)：南伊豆における農家労働力の就業構造とその変化—下田町吉佐美の実態分析—。東京教

育大学農学部農村経済学卒業論文 36頁.

- 3) 吉佐美は1889年、隣接する大字大賀茂、田牛と合併し、古名の朝日里からその名をとり、朝日村と称していた。その後、1955年、下田を中心とする6カ町村との合併により下田町吉佐美となり、1971年の下田町の市制施行にともない、現在の下田市吉佐美となった。
- 4) 尾留川正平(1958):特殊蔬菜園芸地域の形成. 東京教育大学地理学研究報告, 第2巻, p.42.
- 5) 静岡県(1968):静岡県の百年. p.113
- 6) 静岡県賀茂郡教育会(1914)南伊豆風土誌. p.384.
- 7) 大沢村の依田佐二平は、1872年に依田一族の子女数名を群馬県富岡製糸工場に派遣して製糸技術を学ばせ、1875年に松崎製糸場を設立し、操業を開始した。
- 8) 依田佐二平の弟、勉三は熊谷県島村(現群馬県)で養蚕技術を修得し、松崎周辺に養蚕技術を広めた。
- 9) 松崎市場は、そこで日本で最も早くせりが行なわれたため、繭価格決定の役割を果たしていたといわれ、郡内をはじめ、県外から仲買人がきて盛況をきわめたという。
- 10)最後まで残っていた松崎・岩科の製糸工場も1933(昭和8)年に閉鎖されるに至った。
- 12) 内藤 充(前掲2), p.76)によれば、吉佐美では、区長の指示のもとに、北条・里条・入条・浜条の4つの組頭が正月の「吉例」(明治以前は正月11日, 明治以後は旧暦の2月11日)にそれぞれの組の者を一堂に会してこの郷山の利用を決める慣行が存在した。
- 12) 前掲6), p.324.
- 13) 前掲2), p.76.
- 14) 吉佐美地区において一般に言われている言葉で、下は大賀茂川下流、上は大賀茂川上流をあらわし、畑および水田の質を意味するわけではない。
- 15) 法螺ヶ岳に源を發し、全長6.4km.
- 16) 静岡県東賀地区農業改良普及所(1957):農業改良計画. p.20.
- 17) 内訳は、温室・温床花卉栽培農家2戸、面積10a、露地栽培農家6戸、面積60aである。
- 18) 土屋準二(1913):南伊豆畜産史.
- 19) 内藤 充(1969):前掲2), p.15.
- 20) 内藤 充(1969):前掲2), p.16.
- 21) 石井米蔵は、大正時代安房郡で生産された牛乳を、東京の市乳として供給することに努力した人で、房総煉乳K.K.が、東京菓子株式会社(明治乳業の前身)になってからも同社の市乳工場へ牛乳を送ることに奔走した。彼は一種の牛乳ブローカーで、氏が酪農のおこりつつある南伊豆に注目し、明治乳業装品K.K.を設立し、それを森永乳業に有利に販売することなどで、面目躍如としている。
- 22) 斎藤 功(1975):南伊豆における酪農の発展と推移, お茶の水女子大人文学部紀要, 29巻2号, 59~78.
- 23) 石水照雄(1957):南伊豆の酪農. 人文地理談話会報, Vol.1, p.34.
- 24) 石水照雄(1957):前掲23), p.34.
- 25) 斎藤 功(1975):前掲22).
- 26) 内藤 充(1969):前掲2), p.15.
- 27) ほかに男性は、青刈り飼料の採取や、農閑期には山仕事や炭焼き、さらに漁労等に従事していた。一方、女性は畑にでて草取りを行ったりしていた。その他、農繁期を除いて、男性はワラ仕事、女性は唐臼を使っているのモミすりなどのよなべ仕事をしていた。
- 28) 内藤 充(1969):前掲2), p.25.
- 29) 内藤 充(1969):前掲2), p.25.
- 30) 専業費は1,300万円で、この7割の補助をうけて実施された。
- 31) 内藤 充(1969):前掲2), p.61.
- 32) 石井英也(1970):わが国における民宿地域形成についての予察的考察. 地理評, Vol.43, No.10, 607~622,
- 33) 斎藤 功(1975):前掲22), p.75.
- 34) 以下の記述には、筆者らの聞きとり調査のほか、内藤 充(1969):前掲2), pp.42~46をもあわせて参照した。
- 35) 尾留川正平・山本正三他(1974):前掲1), p.9.

- 36) 内藤 充 (1969) : 前掲 2), p. 78.
- 37) 什長は10戸単位が原則とされ, これは「ユイ」の関係にあった.
- 38) 石井英也 (1970) : 前掲32), 607~622.
- 39) 尾留川正平・山本正三他 (1974) : 前掲1), p. 10.

Transformation of a Coastal Settlement, Kisami, on Izu Peninsula

Hideya Ishii, Isao Saito and Yukihisa Uchiyama

Kisami is a settlement in the southern part of Izu Peninsula about 150 km southwest of Tokyo. It is situated 4 km southwest of Shimoda Shi, which is a center of South Izu. In 1961 Izu Kyuko railway line set up and South Izu has been directly connected with Tokyo. Since then all settlements in South Izu have rapidly changed with the development of tourism and urbanization of Shimoda Shi.

Kisami was primarily agricultural settlement and it was a little different from many other settlements in South Izu, the inhabitants of which were depend upon coastal fishery rather than agriculture. In Kisami the dairy farming and horticulture were introduced and spread after the early period of Showa Era (about 1930). It can be said that Kisami had a character of suburban agricultural district of Shimoda Shi. As we clarified already,¹⁾ however, Kisami showed also a basic characteristic of the settlements in South Izu, where each household made a living by connecting various economic activities on the hills, on the farm lands and off the coast. Here were generally combined the charcoal production and gathering grasses on the hills, farming and small coastal fishery. The farming was consisted of subsistence agriculture such as rice, wheat, sweet potatoes and beans growing and of commercial agriculture such as sericulture, dairy farming and horticulture. The latter varied chronologically. Each household carried out these economic activities under the strong regulations of communal society.

After the opening of Izu Kyuko railway line the development of tourism were extensively made by foreign tourist enterprises, including Izu Kyuko capital, one of the great private railway companies. In such circumstances the inhabitants had to change their way of life, because it became difficult to satisfy their desire for the higher income by the agriculture and fishery. On the other hand the opportunities for employment expanded. The number of daily employment in construction works and of commuter to Shimoda Shi has increased rapidly in Kisami, too. It became, therefore, impossible to maintain the communal society and the use of most communal lands were abandoned. Some of them were bought to foreign enterprises. It gave an impetus to the advancement of foreign capitals. Meanwhile the number of pensions has also increased. Most of households built new houses or rebuilt their houses not only for the pension, but also for the apartment house.

Thus, the newly developing activities have changed the previous way of life of the inhabitants and related landscape in Kisami, emerging many problems such as the increase of fallow, desolation of fishery, the economic instability of the inhabitants by the disposal of their farm land etc.

1) Shohei Birukawa, Shozo Yamamoto, Nobuo Takahashi, Hideya Ishii, Akira Tabayashi et Akihisa Sakurai(1974) : Transformation des villages côtiers dans le sud d'Izu, Journal of Geography, Vol. 83 pp. 205—231.